

UFO学から見た『武江年表』の空中現象

—妖怪研究の国際化に向けて—

大島清昭*

OSHIMA Kiyooki

Aerial Phenomena in "Chronology of the Edo Period" from the Perspective of Ufology

Toward the Internationalization of Yōkai Studies

In my 2015 paper, I recommended that Yōkai Studies could benefit from international research into paranormal phenomena. This paper is a companion to that one. "Chronology of the Edo Period" is a chronology of events in Edo from 1590 to 1873. Many mysterious aerial phenomena were recorded in this chronology. This paper attempts to internationalize Yōkai Studies. It examines the aerial phenomena mentioned in "Chronology of the Edo Period" from the viewpoint of Ufology. The descriptions in the chronology are fragmentary, but, by applying Ufology, it is possible to compare cases. Now more than ever, Yōkai Studies should make use of Ufology, not keep its distance from it. For example, a picture of many UFOs flying over a nuclear power plant in Fukushima at the time of the 2011 Tōhoku earthquake and tsunami was covered by overseas media. Judging this information from the viewpoint of Ufology, it is possible to understand such a phenomenon.

キーワード: UFO学 妖怪研究 国際化 超常現象 空中現象

* 所属機関なし

はじめに

UFO学 (Ufology) といえ、天文学、気象学、物理学、精神医学など、主として自然科学の立場から行われる実在・非実在を議論する研究を思い浮かべがちだが、実際の UFO 学では歴史学や民俗学など人文社会科学からのアプローチも行われている。

ジャック・ヴァレーが UFO 現象と妖精伝承の類似点を指摘したことは比較的有名だが [Vallee 2014 (1969)]、他にもデビッド・M・ジェイコブスのアメリカ UFO 論争史に関する歴史学的研究 [ジェイコブス 2006] やカーティス・ピーブルズの懐疑的な立場から描かれた UFO 神話⁽¹⁾ を巡る年代記が挙げられる [ピーブルズ 2002]。またトマス・E・ブラードの研究は神話学及び民俗学的知見を導入しているし [Bullard 2010]、日本でも稲生平太郎が UFO 現象と民間伝承との関わりやその不可解さを軽妙な語り口で論じている [稲生 2013]。ちなみにカール・G・ユングの「空飛ぶ円盤 (flying saucer)」と曼荼羅に関する研究は [ユング 1993]、実在・非実在を議論する研究と人文社会科学的な研究の中間あたりに位置づけることができるかもしれない。

超常現象研究全般に範囲を拡張しても、興味深い研究や論考が幾つも発表されている。

UFO 学では UFO 現象と心霊現象の関連が指摘されているが [ハイネック・ヴァレー 1981: 106-107]、心霊研究 (Psychical Research) から同様の指摘がある [グラッタン＝ギネス 1995: 346-351]。ジョン・A・キールは UFO の目撃と共に「モスマン (蛾男)」という怪物が目撃された事例を報告しているが [キール 1984]、隠棲動物学 (Cryptozoology) では「ビッグフッド」と UFO の目撃が関連づけられる事例がある [ピクネット 1994: 352; 羽仁 2001: 189]。ケネス・リングはアブダクション (UFO 搭乗者による誘拐) と臨死体験を比較し、両者の特徴が類似していることを明らかにした [リング 1997]。さらにデヴィッド・J・ハフォードは「金縛り鬼 (Old Hag)」の体験と UFO 現象との関連を指摘している [ハフォード 1998: 232-233]。

現在の UFO 学は、人文社会科学や様々な超常現象の研究分野などの影響を受け、その裾野を広げている。そして、こうした UFO 学の蓄積を参照することは、妖怪研究の国際化を進める上で非常に重要だと思われる。

筆者は、本誌第7号で妖怪研究の国際化に向けての実験的な試みとして、心霊研究の視点から『死霊解脱物語聞書』の霊媒現象を論じた [大島 2015]。この時、筆者は妖怪研究の国際化として、「国際的な超常現象研究の一環として妖怪研究を行い、海外の事例との比較を意識しながら発信する方向性」を提示した [大島 2015: 30]。妖怪研究と超常現象研究の各々の分野の研究対象は多く共通している。そして、妖怪研究の対象である妖怪種目の総体の範囲が広いことから、妖怪研究が欧米では細分化されている心霊研究、超心理学、UFO 学、隠棲動物学などを統合し、総合的な研究を行うような可能性を秘めていることを指摘した [大島 2015: 37]。

本稿はその姉妹編であり、日本における「光物」などの空中現象の事例を UFO 学の枠組みで捉えようという試みである。そもそも日本では、昭和6年 (1931) という非常に早い段階で、神田左京が「不知火」「人魂」「火の玉」などについて自然科学的な妖怪研究を行っている [神田 2005]。これはアメリカ空軍によって UFO に対する調査が行われるより16年も早い。それ以降も角田義治が神田同様に自然科学的な立場から「怪火」についての研究を行った [角田 1979; 1990]。近年では大森亮尚が『日本書紀』に UFO と呼べるような現象が記載されていることを紹

介し[大森 2011: 63-69]、小松和彦監修『日本怪異妖怪大事典』にも「UFO」の項目がある[小松 2013: 579-580]。つまり、妖怪研究はUFO学よりも早くUFO現象を研究してきたし、現在も研究の対象にはなっている。本来ならば、妖怪研究はUFO学を包含しているのだ。しかし実情とはいえば、UFO学の蓄積が十分に反映されているとはいえないように思われる。

本稿では改めてUFO学の業績を参照することで、妖怪研究とUFO学の垣根を崩したいと考えている。具体的には、UFO学の視点から『武江年表』に記載された不可思議な空中現象を見ていくことにする。『武江年表』を「記録したのは、江戸の草創名主の一人、斎藤月岑(幸成)で、祖父長秋(幸雄)、父莞斎(幸孝)から引き継いだ、『江戸名所図会』全二十巻の完成を成し遂げた人」であり、「武江」とは「武蔵国江戸」を意味する[今井 2004: 279]。「その内容は武士を中心にしたものではなく、むしろ武士という大きな権力の下にありながら、遅く生き続けた庶民の世界を同じ庶民の眼で眺め、年代別に記録した年表だった」[今井 2004: 279]。『武江年表』正編は、前編が天正18年(1590)8月1日から寛保3年(1743)、後編は延享元年(1744)から嘉永元年(1848)までの記録であり、それぞれ嘉永2年と同3年に刊行された。月岑はその後も時世の変遷を記録し続け、嘉永2年から明治6年(1873)までを記した続編を完成、「附録」として明治10年までの概略事象も付記し、明治11年の1月に『武江年表』を完成させた[今井 2003a: 16-17]。さらに『武江年表』は月岑自身が誤りの訂正を願ったため、喜多村筠庭、関根貞誠、朝倉無声、今井金吾らによって補訂されている。

1. UFO とは何か

(1) UFO の定義

一般的にはUFOというと、異星人や宇宙船というイメージが強いが、そもそもUFOとは未確認飛行物体(unidentified flying object)の略であり、地球外起源であるというのはあくまで幾つもある仮説の1つに過ぎない。その上、皆神龍太郎によれば、目撃者からUFOとして報告される実に95%は、星や惑星、飛行機などを誤認したものである[皆神 2008: 18-48]。

UFO学のガリレオと呼ばれる天文学者ジョセフ・A・ハイネック⁽²⁾は、UFOを「空中ないし地上にて目撃された物体ないし発光に関し報告される現象で、その外見、軌道、力学的・光学的行動がいかなる既存の論理的説明にも合致せず、さらにまた最初の目撃者を当惑させたばかりでなく、専門技術的に良識ある分析確認能力を有する人々により、入手可能なすべての証拠が厳密に検証されたのちも、なお確認できぬまま残る現象である」と定義した[ハイネック 1978: 25-26]。

さらにハイネックは、UFOそのものを研究対象にするのではなく、UFOに関する報告を研究の対象にしているという[ハイネック・ヴァレー 1981: 43]。UFO報告とは「一般に認められる基準により、信頼でき、かつ精神的に正常と判断された人、もしくは人々による陳述で、個人の視覚か器械の助けによって識別した空中ないし地上の物体や光、ないしそれが原因と推定される(既知のいかなる物理現象・物体・過程^{プロセス}ないし心理的事件・過程にも該当しない)物理的效果について述べたもの」である[ハイネック 1978: 19]。ハイネックは、UFO報告を(1)遠距離から観察された目撃報告と(2)近距離からの目撃報告(接近遭遇^{クロス・エンカウンター})の2つに分類する⁽³⁾。さらに(1)は夜間発光体、日中円盤体、レーダー=眼視の3つのカテゴリーに、(2)は第1種接近遭遇(単純な接近遭遇)、第2種接近遭遇(生物、無生物双方に物理的影響を与える)、第3種接近

遭遇（UFOの内部、あるいはそばに「搭乗者」の存在が報告される）の3つのカテゴリーにわけ、合計6つの分類を提示している [ハイネック 1978: 46-51]。この時、コンタクティー⁽⁴⁾の事例は第3種接近遭遇には含めない [ハイネック 1978: 50]。現在のUFO学では、この分類に第4種接近遭遇としてアブダクションが加えられる [ピクネット 1994: 384]。

先に、UFOが地球外起源であるというのは仮説の1つと述べたが、その他にも、心理学的現象説、超常現象説、精神投影説、構造の歪み理論、地光仮説、並行宇宙説、異次元仮説、プロジェクター理論、タイムトラベル説などの仮説が存在する [ルトビガー 2007: 185-202]。

(2) UFO 略史と日本の UFO

現代のUFO神話において重要なのは、ケネス・アーノルド事件である。1947年6月24日アメリカの実業家アーノルドは、自家用機で飛行中に9個の謎の飛行物体を目撃した。この事件の報道によって「空飛ぶ円盤」という言葉が生まれ、世界中に広まった [ジェイコブス 2006: 45-46]。しかし、それ以前にも不思議な飛行物体の目撃事例は存在する。1896年から1897年にアメリカの広い範囲で謎の飛行船が目撃されたり [ジェイコブス 2006: 13-41]、第二次世界大戦中には米軍パイロットが日本やドイツ上空で謎の発光体（「フーフファイター」と名付けられた）に追尾されたり、1946年から1948年には西ヨーロッパ及びスカンジナビア半島で「ゴースト・ロケット」と呼称される葉巻型の謎の飛行物体が目撃されたりしたのだ [ジェイコブス 2006: 44-45]。

そもそもUFO報告の事例は、古代から前近代までの間にも幾つも記録されている⁽⁵⁾。ジャック・ヴァレーとクリス・オーベックは紀元前から1879年までの間の500件の不可思議な空中現象の事例を紹介している [Vallee & Aubek 2010]。ここには日本の事例も32件含まれている⁽⁶⁾。

池田隆雄によれば、日本で一番古い記録と思われるのは『扶桑略記』の推古天皇4年（596）11月に「法興寺（現在の元興寺）で供養会が催されているときに、蓮の華のような形をしている天蓋のような物体が天空から降りて来て滞空し、色を変えたり、形を次々と変化させた」という記述だそうだ [池田 1974: 10]。池田は他にも、『帝王編年記』『法成寺撰政記』『皇年代私記』『百鍊抄』『新補倭年代記』『看聞御記』『大乘院日記目録』『後太平記』にUFOに関する記述があることを紹介している [池田 1974: 10-12]。稲生平太郎も「近世の随筆類を検索してみれば、かなりの頻度で空に光り物が目撃されていたのがよくわかるだろう」と述べ、具体的に『天明紀聞』『折々草』などを挙げている [稲生 2013: 108-109]。『武江年表』もこうしたUFOに関する記述がある文献の内の1つといえる。

2. 『武江年表』の光物

(1) 光物の概況

さて、具体的に『武江年表』の「光物」を抽出すると、以下の18事例となる。

光物① 寛永7年（1630）12月23日「大地震。戌刻、光物飛行し、其音すさまじかりし」 [今井 2003a: 91]。

光物② 寛文6年（1666）3月26日「人形のごとき光物、東方に飛ぶ（長二丈余といふ）」 [今井 2003a: 167]。

- 光物③ 正徳4年(1714)11月11日「夜、光物、辰巳より戌亥へ飛。其音、雷の如く震動す」
[今井2003a:265]。
- 光物④ 享保元年(1716)11月29日「夜、光物飛ぶ」[今井2003a:269]。
- 光物⑤ 享保12年(1727)3月朔日「夜五半時、光物、東より西へ飛。雷の如く鳴る」[今井2003a:289]。
- 光物⑥ 享保13年(1728)正月16日「夜、光り物飛ぶ」[今井2003a:292]。
- 光物⑦ 元文3年(1738)2月朔日「夜五時頃、光物飛ぶ」[今井2003a:316]。
- 光物⑧ 寛延2年(1749)8月「光物飛ぶ」[今井2003a:343]⁽⁷⁾。
- 光物⑨ 明和8年(1771)5月17日「光物飛ぶ」[今井2003b:41]。
- 光物⑩ 天明8年(1788)4月11日「夜戌刻、光物飛ぶ。昼の如し」[今井2003b:110]。
- 光物⑪ 寛政4年(1792)6月18日「亥刻、光物、西南より東北へ飛。大さ、笠のごとし」[今井2003b:130]。
- 光物⑫ 文化4年(1807)2月14日「明六半時、東より西へ光物飛ぶ」[今井2003b:185]。
- 光物⑬ 文化4年(1807)9月3日「酉の刻、北東より南へ光り物飛ぶ。大サ毬の如く青みあり」
[今井2003b:190]。
- 光物⑭ 文化9年(1812)11月9日「明六半時、東より西方へ、大二尺余りの光物飛ぶ(武州生麦村の辺へ落。其響、雷の如く、大なる野衾の如き獸にして、肉翼ありしといへり)」[今井2003b:210]。
- 光物⑮ 文化14年(1817)11月22日「晴天、未刻頃、江戸市中雷鳴の如き響して、光り物空中を飛ぶ(武州八王子横山宿の畑中へ落たり。長三尺・幅七尺・厚六寸程。燻りたる石也)」[今井2003b:226-227]。
- 光物⑯ 文政3年(1820)9月28日「夜、光物飛ぶ」[今井2003b:248]。
- 光物⑰ 嘉永5年(1852)正月8日「暁丑刻過、光り物、乾より巽へ飛ぶ」[今井2004:35]。
- 光物⑱ 文久2年(1862)7月15日「戌下刻より光物、筋を引て坤の方へ飛ぶ事夥し(頭上をはなる、事甚近くして、引もきらず)。暁の頃、尚盛なり。諸人恐怖せり」[今井2004:146]。

そもそも『武江年表』には天体に関する記述が幾つもあるが、星に関しては「流星」「彗星」「異星」などの言葉で表現されている。試みに寛文9年(1669)3月3日の記述を見ると、「流星東に行。音、雷の如し」とあり[今井2003a:172]、「光物」の記述とかなり似ているのがわかる。しかし、これはあくまで「流星」として記述されている事例である。

では、『武江年表』でいう「光物」とは如何なるものなのか。一見してわかるように断片的な記述が多いのだが、光物②「東方に飛ぶ」や光物③「辰巳より戌亥へ飛」などから直線的に飛行していることが窺える。飛行する高度に関しては不明な記述が多いが、同じ「光物」といっても事例によって高度には幅があるようだ。光物⑭⑮はともに「光物」が落下したという事例である。この時、光物⑭は「野衾の如き獸」であるが、光物⑮は火球の事例のようで、隕石らしきものが発見されている。つまり星よりは低い位置を飛行していたと思われる。さらに光物⑱は「頭上をはなる、事甚近くして、引もきらず」として、より低い位置を飛行していることがわかる。

UFO学の視点から見ると、光物①③④⑤⑥⑦⑩⑪⑬⑯⑰⑱はジョセフ・A・ハイネックの分類の内、夜間発光体に該当する(光物⑱に関しては第1種接近遭遇とも考えられる)。ハイネック

は典型的な夜間発光体の特徴として、「一般には光点ではなく、あいまいな外形をもち、色は変化するが、たいいていの場合、黄色がかったオレンジの明るい光である。——もっとも、七色のうちどれかがつねに欠けるということはないが」と述べており [ハイネック 1978: 76]、光物①⑩はこうした特徴に近いだろう。ただし、ハイネックは「また、それは、気球、航空機、そのほかの既知の物体とは考えられない飛び方を見せ、しばしば見かけ上知的な行動をとる」とも述べている [ハイネック 1978: 76]。『武江年表』の「光物」の多くは直線的な飛行経路をとっているようなので、この特徴は合致しない。そういう意味では、光物⑮のように多くの事例が現代では容易に自然科学的な説明がつく現象であった可能性も高い。その中で特異と思われるのは光物②である。

光物②は人形のような形状で、かなり大きい。人の形をしたものや人物そのものが空中に出現する事例は世界中で報告されている。「ファティマの奇蹟」として知られるポルトガルの聖母の顕現は代表的な事例だろう。ファティマでは発光体も同時に目撃されたことから、UFO 現象と比較した研究も行なわれている [スペンサー 1998: 299; Fernandes & D'Armada 2005]。

『武江年表』の「光物」は各々の記述が短いために個別的特徴を描き出すのは難しい。しかし、これらの事例の中にはこれまでの UFO 学で議論されてきた発光体と関連する要素も見受けられる。以下ではそうした要素として、地震と音について取り上げてみたい。

(2) 光物と地震

光物①の事例は、大地震の時に「光物」が飛行した事例である。

池田隆雄は「地震のとき、地震の起った地域上空を通過する火球や怪物体が見られる例は、古い文献を調べてみると、あちこちに載っている」と述べて、『大日本地震資料』『日本地震資料』に収められた文献から抽出した事例を具体的に紹介している [池田 1974: 12-24]。

先に UFO の起源仮説で挙げた構造の歪み理論は、地震の発生と発光体の目撃事例に相関があることから提唱された。この仮説はマイケル・パーシンガーによって提唱され、地質構造に生じた歪みが地震などで解放され、その大きなエネルギーが発光現象を引き起こしたり、幻覚を生じさせたりするというものである [ルトビガー 2007: 189-191]。従って、日本以外の地域でも UFO と地震は関連していることが指摘されている。

マーティン・D・アルトシューラーも「地震の発生時および発生前後に、激しい電気活動がたびたび報告されている。空中に見られる異常な発光現象はこのカテゴリーに分類される」として、不明瞭で瞬間的な発光、輪郭がはっきりした移動する発光体、明るい炎と放射、空および雲の燐光、という4つの分類を示している [アルトシューラー 2005: 170-171]。

それから、UFO 学からだけでなく、中世の災害予兆という観点からも、笹本正治が地震の前後に目撃される「光物」についての事例を挙げている [笹本 1996: 29-31]。

(3) 光物と音

光物①③⑤⑭⑮は飛行に伴い「雷の如く」と形容されるような大きな音が発生している。「未確認飛行物体の目撃者は現象に関連して生じるいろいろな音を報告している。急加速あるいは高速飛行中の鋭い、爆発的な音を報告している人もいる」ことから [ブルーメン 2005: 156]、これらの「光物」の事例は一般的な UFO 報告と一致しているといえる。ただし UFO 学でよりいっそう注目すべき事例となるのは、むしろ音（衝撃波）が「起きずに、地球大気中での音の最大速度

をはるかに超えた速度で移動する UFO の報告」である [ブルーメン 2005: 156]。

光物⑮が火球だと思われることは述べたが、他の事例も爆発流星という可能性がある。爆発流星は明るい惑星と同じかそれ以上の明るさを持つ流星で、「数分後、雷、大砲の轟音、ライフルやピストルの発射音などと表現される音を聞いた目撃者もいる。このような音は、質量の大きい隕石や複数の破片の落下時の減速で生じる」[アルトシューラー 2005: 173]。

3. 『武江年表』のその他の空中現象

(1) 天火

「光物」に似た空中現象として「天火」という現象が3件記録されている。そもそも「天火」は、妖怪研究では馴染みがあるものだ。妖怪種目の「天火」は愛知県、佐賀県、熊本県、岐阜県という「怪火」であり、「テンピ」「テンピ」「テンカ」と呼ばれる [村上 2000: 236]。愛知では夜間に自分の行く手が昼間のように明るくなるもの、佐賀と熊本では落ちてくる火の玉、岐阜では音を発しながら飛行する発光体なのだという [村上 2000: 236]。では、『武江年表』における「天火」とはどのようなものなのだろうか。

天火① 安永元年(1772)2月28日「天火、坤より艮へ飛ぶ」[今井 2003b: 46]。

天火② 安永元年(1772)3月19日「暮方、天火、西より東北へ飛ぶ」[今井 2003b: 48]。

天火③ 文化3年(1806)3月3日「江戸、天火、西南より東北へ飛ぶ」[今井 2003b: 180]。

以上の事例からは、「天火」が直線的な軌道の飛行物体であり、飛行時に音は発していないことがわかる。またどの事例も飛行経路が似ている。「天火」の記録は上記3件のみであり、発生した時期も近い。さらに「光物」ではなくあえて「天火」と記していることから、見た目が光よりも火に近い空中現象だったのかもしれない。ちなみに妖怪種目の「怪火」の多くは、UFO学上の夜間発光体に分類できるとされる(もちろん目撃者からの距離によっては接近遭遇となる)。

(2) 怪獣

文政7年(1824)8月15日に「夜、雨中、牛の如き怪獣二疋、北より南へ空中を飛行。光あり」とある [今井 2003b: 264]。これと関連するのは光物⑭である。光物⑭ではその正体を「野衾の如き獣」としているが、「野衾」とはムササビのことであり、近世では妖しい動物とされていた [村上 2000: 266]。この他、近世の随筆における「光物」の正体としては青鷲、蟾蜍、大蜘蛛などがあり [柴田 2008: 541-544]、妖しい動物が光を発しながら飛行する事例は珍しくない。

UFO学では空中に出現した不可思議な生物の事例が集められており [Vallee & Aubeck 2010: 62, 180-182, 225-226]、飛行する「怪獣」もこうした事例に属するものと考えられる。

(3) 毛降

空から毛が降るという現象は、欧米ではファフロツキーズ (Fafrotskies: Falls from the skies) と呼ばれる超常現象に含まれる。代表的な事例は、空から大量の魚や蛙が降るというもので、アメリカの作家で超常現象研究の先駆者でもあるチャールズ・フォートの著作に見られる [Fort

1974: 12, 48, 81-83, 95, 183-184, 190, 244, 302-303, 525, 534, 544-546, 594]。

一方でUFO学ではエンジェル・ヘア（エンジェルズ・ヘア）という現象が報告されている。これは「UFOが飛行した後などに空中から降って来る、細い糸状の物質」で、実際には「大部分は蜘蛛の糸である」という[羽仁 2001: 14]。あるいはUFOを目撃した現場から発見される薄いコットンのような繊維で、「UFOによって放出された静電界が原因で微粒子が集まったものである」と解釈されている[スパンサー 1998: 82]。『武江年表』では単に毛が降るという記述のみでUFOの目撃情報はないが、念のため以下に事例を記しておく。

毛降① 寛永7年（1630）6月23日「大地震。毛降」[今井 2003a: 91]。

毛降② 慶安3年（1650）6月4日「諸国毛降（長四、五寸）」[今井 2003a: 133]。

毛降③ 寛政5年（1793）7月16日「白き毛降る」[今井 2003b: 133]（関根只誠補訂）。

毛降④ 天保7年（1836）6月19日「夜、獣の毛、所々へ降る」[今井 2003b: 307]。

おわりに

これまで見てきたように、『武江年表』には「光物」「天火」「怪獣」「毛降」という不可解な空中現象についての記述があるものの、1つ1つの記述は断片的で情報量に乏しい。しかし、UFO学の蓄積を利用することで、国際的に収集された事例と比較検討を行うことができた。その結果、『武江年表』の空中現象は日本に特有の現象ではなく、また近世に特有の現象でもないことがわかった。筆者は本誌第7号で「こうした国際化を経ることによって、妖怪研究は現在学としての可能性を取り戻すことができるのではないだろうか。この時、過去に収集された妖怪種目も、これから採集される超常現象の体験報告も、ともに生きた資料として私たちに語りかけてくれるだろう」と述べた[大島 2015: 38]。実際、UFO学から見ると『武江年表』の空中現象の記録は、古代から現代にかけて通時的に報告されているUFO現象の一部であり、今日の事例と比較可能なデータとして評価できる。

さて、最後に今後の展望について述べたい。今回は主に通時的に共通するUFO現象について論じてきたが、現在学としての妖怪研究の実践のためには、やはり「いま」問題になっているUFO現象に焦点を当てて考える必要があるだろう。例えば、「東日本大震災で福島第一原子力発電所が被災したときには、大津波の上空に多数のUFOが飛び交っているシーンが、CNNをはじめ世界中のメディアによって報道」された[佐藤 2014: 245]。ここで重要なのは、そのUFOの正体は何なのかではなく、何故このタイミングでUFOが飛び交う映像が報道されたのかという背景である。既に見てきたようにUFO現象と地震は関連するといわれるが、さらにUFOは原子力発電所や核施設の周辺で目撃事例が多く[ヘイスティングス 2011; 佐藤 2014: 200-245]、東北地方そのものもUFOの目撃事例が多い場所である[佐藤 2014: 74-103]。地震、原子力発電所、東北という3つの要素は、それぞれUFO現象と密接に関わっているからこそ、あのタイミングでUFOの映像が流れたと考えられる（さらに陰謀論という要素も関係しているだろう）。映像の真偽はともかく、東日本大震災で福島上空をUFOが飛び交うという状況は、UFO現象の文脈からすれば、ある程度の信憑性をともなって受容される素地があったのだ。

妖怪研究はUFO学と距離を置くのではなく、その蓄積を包含することで、今よりももっと「い

ま」に切り込む力を持つのではないだろうか。それをより具体的に示すのが今後の課題である。

註

- (1) UFO 神話とは「異星人の乗った宇宙船が地球上で目撃されている、という考えを巡って発展していった信念体系」であり [ピーブルズ 2002: 3]、UFO 学ではしばしば使用される言葉である。
- (2) ハイネックは長年 UFO 問題調査のアメリカ空軍科学顧問を務めた。アメリカ空軍は公式に UFO 問題を調査するため 1947 年 9 月に「プロジェクト・サイン」を創設、これは 1949 年に「プロジェクト・グラッジ」と改称される。1951 年からは「プロジェクト・ブルーブック」と改称し、1969 年末に終結する [ハイネック 1978: 16-18]。
- (3) 接近遭遇とは、一般的に 500 フィート以内に目撃者に接近した目撃報告である [ハイネック 1978: 120]。
- (4) コンタクティーとは「UFO 搭乗員と接触したと主張する人物のこと」で [羽仁 2001: 18]、ジョージ・アダムスキー、ハワード・メンジャー、ダニエル・フライなどが有名。
- (5) こうした事例を地球外仮説で解釈し「古代に他の天体から地球にやってきた異星人が様々な痕跡を残しているという考え」を宇宙考古学(古代宇宙飛行士説)という。これは異星人が「遺伝子操作で人類を創造し、文明の創世に関与したためその記憶が神として留められたという主張も含む」[羽仁 2001: 13]。宇宙考古学の有名な論者として、エーリッヒ・V・デニケンやゼカリア・シッチンがいる。
- (6) ここには 32 の事例のほか、滝沢馬琴『兎園小説』に記載されている「うつろ舟」も紹介されている [Vallee & Aubeck 2010: 442-444]。「うつろ舟」が UFO 学で注目されるのは、その形状が現代の空飛ぶ円盤に似ているためである。なお、「うつろ舟」に関しては、加門正一の優れた研究がある [加門 2008; ASIOS 2015: 153-164]。
- (7) この年は「当夏中より雨繁く降りて、七月も晴間なく、二十五日にいたり大風雨なり。夫より雨降り続き、八朔大風起り、時々雨降。八月十三日の暁より北風、大嵐となりて、牛込・小日向出水、下谷浅草辺迄溢れ出、高田・関口辺、家を流し、人を溺す。(中略) 九月にいたり、漸晴天となる」とあることから [今井 2003a: 342-343]、光物⑧はこうした気象条件と関係している可能性もある。

文献

日本語文献

ASIOS 2015 『謎解き超常現象Ⅳ』彩図社

アルトシューラー, M. D. 2005 「大気電気とプラズマ」コンドン, E. U. 監修 『未確認飛行物体の科学的研究(コンドン報告)第3巻 UFOの歴史と科学』(仲間友紀・金田朋子・内山英一訳) ブイッソソリューション

池田隆雄 1974 『日本の UFO』大陸書房

稲生平太郎 2013 『定本 何が空を飛んでいる』国書刊行会

今井金吾校訂 2003a 『定本 武江年表 上』筑摩書房

今井金吾校訂 2003b 『定本 武江年表 中』筑摩書房

今井金吾校訂 2004 『定本 武江年表 下』筑摩書房

大島清昭 2015 「心霊研究から見た『死霊解脱物語聞書』—妖怪研究の国際化に向けて」『現代民俗学研究』7

大森亮尚 2011 「記録の中の妖怪」小松和彦編 『妖怪学の基礎知識』角川書店

- 加門正一 2009『江戸「うつろ舟」ミステリー』楽工社
神田左京 2005『不知火・人魂・狐火』中央公論新社
キール, J. A. 1984『モスマンの黙示』（植松靖夫訳）国書刊行会
グラットン＝ギネス, I. 編 1995『心霊研究—その歴史、原理、実践』（笠原敏雄監訳・和田芳久訳）技術出版
小松和彦監修 2013『日本怪異妖怪大事典』東京堂出版
笹本正治 1996『中世の災害予兆—あの世からのメッセージ』吉川弘文館
佐藤 守 2014『実録・自衛隊パイロットたちが目撃したUFO—地球外生命は原発を見張っている』講談社
ジェイコブス, D. M. 2006『全米UFO論争史—大衆、UFO団体、メディア、科学者、軍人、政治家を巻き込んだ論争の軌跡』（ヒロ・M・ヒラノ訳）ブイツーソリューション
柴田宵曲編 2008『奇談異聞辞典』筑摩書房
スペンサー, J. 編著 1998『UFO百科事典』（志水一夫監修）原書房
角田義治 1979『現代怪火考—狐火の研究』大陸書房
角田義治 1990『自然の怪異—火の玉伝承の七不思議』創樹社
ハイネック, J. A. 1978『UFOとの遭遇』（南山 宏訳）大陸書房
ハイネック, J. A.・J. ヴァレー 1981『UFOとは何か』（久保智洋訳）角川書店
羽仁 礼 2001『超常現象大事典—永久保存版』成甲書房
ハフォード, D. J. 1998『夜に訪れる恐怖—北米の金縛り体験に関する実証的研究』（福田一彦・竹内朋香・和田芳久訳）川島書店
ピーブルズ, C. 2002『人類はなぜUFOと遭遇するのか』（皆神龍太郎訳）文芸春秋
ピクネット, L. 1994『超常現象の事典』（関口 篤訳）青土社
ブルーメン, W. 2005「ソニックブーム」コンドン, E. U. 監修『未確認飛行物体の科学的研究（コンドン報告）第3巻 UFOの歴史と科学』（仲間友紀・金田朋子・内山英一訳）ブイツーソリューション
ヘイスティングス, R. 2011『UFOと核兵器—核兵器施設における驚異的遭遇事件』（天宮 清監訳・ヒロ・ヒラノ・桑原恭男・山川 進訳）環健出版社
皆神龍太郎 2008『UFO学入門—伝説と真相』楽工社
村上健司 2000『妖怪事典』毎日新聞社
ユング, C. G. 1993『空飛ぶ円盤』（松代洋一訳）筑摩書房
リング, K. 1997『オメガ・プロジェクト—UFO遭遇と臨死体験の心理学』（片山陽子訳）春秋社
ルトビガー, I. V. 2007『ヨーロッパのUFO—真の科学的UFO研究の模索』（桑原恭男訳）ブイツーソリューション

外国語文献

- Bullard, Thomas E. 2010. *The Myth and Mystery of UFOs*. Kansas: University Press of Kansas.
Fort, Charles. 1974. *The Complete Books of Charles Fort* New York: Dover Publications.
Fernandes, Joaquim and Fina D'armada 2005. *Heavenly Lights: The Apparitions of Fátima and the UFO Phenomenon*. San Antonio: Anomalist Books.
Vallee, Jacques. 2014 (1969). *Passport to Magonia: From Folklore to Flying Saucers*. Brisbane: Daily Grail Publishing.
Vallee, Jacques and Chris Aubeck. 2010. *Wonders in the Sky: Unexplained Aerial Objects from Antiquity to Modern Times*. New York: Tarcher.